

構造屋魂はちゃぶ台 とオークから 田尾玄秀

朝倉幸子◎TH-1

illustration:Taco◎Switch・エンタテインメント

■家業

羨ましい程の佳き昭和の思い出をもつ、若手構造設計者の田尾玄秀さん。物心つく頃から、構造事務所を営む父の働く姿に馴染んだ。実家の建替工事のとき、コンクリート打設前の型枠の中を黙々と掃除する姿、足場に立ち別人のような厳しい顔で采配する姿。鉄筋の直しのときには、結束線を見よう見まねで一緒に結んだこともある。休日も計算尺を動かしながら「ちゃぶ台」で仕事、夜には好きな晩酌。傍で酒の肴を狙いつつ、ほろ酔いで話す現場ネタ？に想像が膨らむ日常があった。「薄くて長いカンナ屑って綺麗だねー！」と田尾少年も興奮を伝えるのでした。プラントのトラス構造をクレモナで解いた古い青焼きの構造計算書。息子に見せるときは先輩顔である。通学路沿いの素朴な瓦屋根の民家は、頼まれれば住宅設計もこなした父の仕事。大学の建築史演習旅行で見た東大寺の法華堂にも何処か似ていて好きだったという。黙々と設計をやり続けている父親への尊敬、自分を育ててくれた恩返しに、建築の仕事を通して人のためになりたいと思う。「縦建築事務所」に「構造」の二文字がないのは、広い意味で建築設計に勤しむ父を見て来たからかもしれない。将来は、構造に留まらずに建築をと考えているのでしょうか。トラックの運転手になって日本中を巡るなんていう未来予想図が覆ったのも当然。二人の姉も同業、弟は機械屋の技術系一家なのです。

■オークファミリー

もうひとり、密かに父と仰ぐ人がいる、幸せ者の

田尾さん。オーク構造設計の新谷真人さん（本コラム第48回）のことだ。所属した8年間、事務所の柱の一本になって建築をつくってきました。新谷先生と代々所員たちとの結束は驚く程堅い。森部康司さん（本コラム58回）が、事務所の先輩で、オークファミリーの長兄的な存在。今でも弟分は「おまえ呼ばわりされて…」と、実は嬉しそう。「オークだったから縦（モミ）ですよ…」とちょっと冷やかす覇志堂に、当然ですとばかりに頷く田尾さん。最初は自分に勤まるか不安で、目をつぶって飛び込んだ師の元。構造の豊富なポキャブラリーとスキルを身に付けることができた。最終的には、建築家と構造家が協働して建築をつくり上げていく大事さも実感したという。

■これから

独立したのは2013年だから縦建築事務所は3年目を過ぎた。独立前に担当した、「金沢海みらい図書館」（設計／シーラコンスK&H）で、第23回JSCA賞の受賞は大きい。形状は意匠と設備、それに構造が統合されてできていったというプロセスの建物だ。寝る間を惜しんで意匠や設備設計と擦り合わせし続けた

からこそその充実感も味わった。構造から一步踏み込まざるを得ない建築に対して、最後まで妥協せずに解き明かす。辛くてもそれがむしろ心地良いと感じる程、建築に思い入れがもてるのです。

横浜国立大の学生の頃、時々建築棟の屋上から景色を眺めていた。「世の中にはこれだけ一杯建物がある。建築の仕事をやっていれば、食いっぱぐれることはないだろう」

と思ったという。大学院へ行くより早く技術を身につけたいとも考えた。あくまで静かに話す田尾さんだが、内面の強さと直感的なところをもつ人と感じる。

縦（モミ）は、姿が奇麗で、クセがなく食べ物に直接触れても害がないという万能の木。田尾さん自身がまさしく縦なのです。建築家に寄り添った中でもしっかりリードしている田尾玄秀さん。師の新谷先生は構造に留まらず「納まり」を若い設計者に教えている。根っから現場育ちの構造設計者田尾玄秀さんにも、精神は受けつがれているようです。

